

<応募方法>

郵送の場合は応募用紙とあわせて下記応募先の宛先へ、電子メールの場合は応募用紙の項目を記載し、下記応募先の電子メールアドレスへお送りください。学校で取りまとめて応募することも可能です。なお、作品中に他人が著作権をもつ著作物等が含まれる場合には、許諾を得た著作物等とその著作権者等の連絡先のリストも添付してください。

<応募先>

郵送

700-0022 岡山県岡山市北区岩田町2-12F-ADIビル3階北 株式会社ロゴデザイン内「ダイバーシティ推進実行委員会おかやま事務局」宛(応募の際は「子から親へのエール論文在中」と朱書きのこと)

電子メール

diversity@logoo.design

<審査方法、各賞授与>

岡山県内の大学関係者で組織する審査委員会で、厳正に審査を行います。高校生の部・大学生の部それぞれで入選作品を選出し、その中から「岡山県知事賞」「岡山経済同友会代表幹事賞」「岡山大学長賞」を授与します。また、積極的に取り組んでいただいた学校には「ダイバーシティ教育推進学校賞」を授与します。

<入選発表>

2026年12月中旬に本人または担当教員へ入選・入賞の連絡をいたします。なお、入選されなかった方への連絡はいたしません。

2027年1月25日に岡山県庁で表彰式を行います。

(受賞者は表彰式への出席が必須です)

<作品発表>

作品集として冊子を作成し高校や大学、関係者などに配布するとともに、当実行委員会のホームページに掲載いたします。

必須記載事項

応募する論文には、下記内容を全て記載してください。

- 1) 家庭と仕事のはざままで起きている具体的なエピソード
- 2) 親へのエールとなるメッセージ
- 3) 自身の意識や行動の変容ならびに社会に対する希望・提案

重要 一般論やインターネット上の情報をまとめた内容ではなく、**ご自身の体験や葛藤、気づき、行動の変化から生まれた「あなた自身の言葉」による論文を期待しています。**日々の生活の中で感じた違和感や工夫、小さな実践なども含め、実感のこもった独自の視点をぜひお聞かせください。

応募前には必ず募集要項をご確認ください

ホームページに詳細な募集要項を掲載しておりますので、必ず内容をご確認ください。

郵送の際は下記応募欄に必要事項をご記入いただき、論文と同封の上ご応募ください。

URL <https://logoo.design/yell>



応募用紙

| 1. 個人応募記入欄 (個人でご応募いただく場合はこちらをご記入ください) | | | |
|---|--|------|---|
| 氏名 | ふりがな | | |
| 住所 | 〒 — | | |
| 電話番号 | メールアドレス | | |
| 学校名 | 学年 | 年 | |
| 論文内容について | 応募論文には、必須記載事項が全て記載されていますか？(確認の上、チェックを入れてください) <input type="checkbox"/> 記載されていることを確認しました。 | | |
| 2. 学校取りまとめ応募記入欄 人数が多い場合は、必要項目を記載した任意の一覧表を一緒にお送りください。本様式のコピーでも可。 | | | |
| 学校名 | 担当教員名 | ふりがな | |
| 学校住所 | 〒 — | | |
| 担当教員電話番号 | 担当教員メールアドレス | | |
| 1 応募生徒名 | ふりがな | 学年 | 年 |
| 2 応募生徒名 | ふりがな | 学年 | 年 |
| 3 応募生徒名 | ふりがな | 学年 | 年 |
| 論文内容について | 授業や課題として取り組む場合は、募集要件及び必須記載事項を満たした作品のみお送りください。 <input type="checkbox"/> 応募する作品の内容を確認し、募集要件及び必須記載事項を満たしていることを確認しました。(チェックを入れてください) ※募集要件及び必須記載事項を満たさない作品は審査の対象外となる場合がございます。あらかじめご了承ください。 | | |

仕事や家庭で
頑張っている親へ
今だから言える
ありがとう。

子から親への
エール論文
コンクール
2026

普段はなかなか伝えることができない
親への感謝の気持ちを伝える
論文を募集します。

「仕事や家庭で頑張っている親へ今だから言えるありがとう」をテーマとし、仕事や家庭で頑張っている親に対して、泣いたり、笑ったりしたエピソードと親へのエールとなるメッセージを添えて、働き方の多様性など社会におけるダイバーシティの在り方を主に家庭の視点から考える論文を募集します。家庭と仕事のはざままで起きている具体的なエピソードと親へのエールとなるメッセージに加えて、自身の意識や行動の変容ならびに社会に対する希望・提案を交え、作品をお寄せください。

問い合わせ：ダイバーシティ推進実行委員会おかやま事務局
(株式会社ロゴデザイン内)
祝日を除く 月曜日～金曜日 10:00～17:00 TEL：086-289-8436
diversity@logoo.design <https://logoo.design/yell>

主催者：ダイバーシティ推進実行委員会おかやま(岡山県、一般社団法人岡山経済同友会、国立大学法人岡山大学) 後援：岡山県教育委員会、岡山県私学協会

2026 **10/31** 締切
当日消印有効

募集期間 2026年6月22日(月)～10月31日(土)

対象(応募資格)

県内外の高校生・大学生
(専修学校・各種学校生を含む)

募集作品の規格等

書式自由、文字数 1,600 字程度
冒頭に題名(作品タイトル)と氏名を明記してください。

賞の種類と副賞

岡山県知事賞 - 副賞 -
岡山経済同友会代表幹事賞 図書券10,000円
岡山大学長賞

昨年の受賞作品紹介

2025年度
高校生部門

岡山県知事賞
受賞

あたりまえなんかじゃない

岡山県立倉敷天城高等学校2年 新田 涼乃

「女が家事をするのがあたりまえ」と言われる時代は古いのだろうか。私は幼い頃、本当にあたりまえなんだと思っていた。親戚の集まりがあった日、キッチンに立っていたのは祖母と母の二人だった。食器の配膳や机の整頓の手伝いに呼ばれるのも私だけで、兄は呼ばれなかった。私はこのことに何も疑問を持っていなかったのである。

我が家では炊事や洗濯、リビングの掃除などは母の仕事の様になっている。母は決して専業主婦などではない。両親は共働きで、母に家事が集中する理由は特になのである。私が母と父との家庭での仕事量に差があることに疑問を持ったのは、兄と私で求められる手伝いの量の差に不満を持ったときだ。そういえば、なぜ母や祖母ばかりが家事をしているのだろうと考えた。

しかし私は、母があまり家事をしない父に、文句を言っているところを見た記憶がない。母はこの状況に強い不満を抱いていないのかもしれない。恐らく母の家系では「女が家事をするのはあたりまえ」という価値観が幼い頃から根付いているんだろう。もし母が不満に思っていないとしても、重い負担となっていることは事実である。母は家族の中で最も早く起床し、最も遅くに就寝する。母の詳しい睡眠時間はわからないが確実に足りていない。

まず、私が母の負担を減らそうと考え行動したことは、弁当の撤廃を訴えることだった。母は毎日私の弁当を作っており、それが母の起床時間を早めることにつながっているのではないかと考えたからだ。そこで負担を減らそうと、夏バテだの何だの理由をこじつけて弁当の撤廃を訴えたのである。しかし、この作戦は失敗に帰した。母は弁当作りも母親として当たり前の仕事だと思っていたのである。母として当たり前のことをしないということに、罪悪感を覚え、悲しそうな顔をする母が嫌で、高校入学のタイミングで弁当を再開してもらったことになった。

弁当の再開にあたり、母の負担を減らそうと考えたのが兄との協力だった。兄も家事には消極的で、私と家事の手伝い

の分担でもめることが多々あった。しかし、兄も母の仕事量を全く気にしていないわけではなかった。そこで、兄と話し合い、今まで私達の手伝いという形でたまに行っていた家事を、二人の仕事になるように分担した。その結果、母の家事を少しでも減らすことに成功したのである。

しかし、我が家には根強い問題が残っていた。「女が家事をするのがあたりまえ」という価値観が家族の半数以上に残っていることだ。私はこの価値観を払拭するために、不満を言うことにした。私だけに手伝いを求める家族に「一緒に手伝って」と言うことで兄が更に手伝ってくれるようになった。兄が手伝ってくれるようになったからか、母は私だけでなく、兄にも手伝いを求めてくれるようになった。母が私達子供に手伝いを求めてくれるようになったことは大きな一歩となったと思う。

私は「女が家事をするのがあたりまえ」という価値観を長い間持っていた事で、母に大きな負担を課していたことに気づき、それが大きな後悔となった。母の負担を減らすために、弁当の撤廃などを訴えるなど、適切ではない形で行動をしていた事もあったが、最終的には兄と協力し母の負担を少しでも減らすことができたため、これからも母の負担を減らし、私がやれることを増やし、性別で決めない家族での私の役割を探していきたいと思うようになった。また、古い価値観で母に仕事を押し付けていた分、これからは母により感謝を伝えていきたい。

最後に、いつも自分を犠牲にしがちな母へ。いつも、私達家族のために仕事も家事も頑張ってくれて本当にありがとう。お弁当もいらなかったこともあったけど、いつも美味しいお弁当を作ってくれて感謝してます。高校に入ってから、崩しがちだった体調を持ち直せたのも母さんのおかげです。母さんが家事をするのは当たり前だと思っているかもしれないけど、そんなことはないで私やお兄ちゃんにも手伝わせてください。もっと家族を頼ってね。いつも本当にありがとう。

2025年度
大学生部門

岡山大学長賞
受賞

消毒液の匂いと洗濯機の音

青山学院大学4年 今井 颯太

母は夜勤の看護師だ。白衣を脱いでも、家では祖母の介護というもう一つの制服を着る。夜明け前、玄関で靴ひもを結ぶ音、帰宅するとすぐに回る洗濯機の低い唸り。私はその音を、ずっと生活の騒音だと思っていた。

受験期、私は深夜まで机に向かい、台所に立つ母の背中にとげのある言葉を投げた。「また夜勤？家のこと、どうするの」。母は振り返らずに、鍋のふたを押さえた。湯気の向こうで、消毒液の匂いが強くなった。「大丈夫。やるから」。その一言に、私は「当たり前でしょ」と心の中で返した。

ある雨の朝、祖母が玄関で靴を探していた。「学校に遅れるよ」と私が言うと、祖母は小さな声で「仕事に行かない」と答えた。祖母はずっと専業で家を支えた人だ。長年の習慣は、病気が記憶から削っていった今も、からだの奥に残っている。祖母の手は、昔の家事の動作をなぞるように宙を撫でた。その手を包んだ瞬間、私ははじめて、目の前の二人が“働く人”であることを同時に理解した。病棟で働く人と、家を維持する人。どちらの汗にも、同じ塩味がある。

その日から、私は家事の手順を「見える化」した。冷蔵庫に家事分担のメモを貼り、祖母の服薬表を作り、母にはオンラインの共有カレンダーを提案した。最初はうまく回らない。祖母は表を破り、私は試験前に皿洗いを忘れ、母は夜勤続きで予定を更新できない。けれど、洗濯機の音に合わせて三人で深呼吸する時間を決めると、少しずつ歯車が噛み合った。家の音が、生活を支えるリズムに変わっていった。

私は大学でヤングケアラーの支援制度を調べ、学内の掲示板に相談窓口の案内を貼った。地域の包括支援センターに連絡し、ショートステイの情報を集め、ゼミで「家庭のケアと学業の両立」をテーマに小さな発表もした。誰か一人が我慢して背負うのではなく、制度と周囲の手を借りることが“働く”家族の持続可能性だと知ったからだ。

その他の受賞作品については
ホームページに掲載しております
スマホからのアクセスはQRコードをご利用ください
<https://logoo.design/yell>



母へ。あなたは夜勤のたびに、病院では患者さんの名を、家では祖母の名を呼ぶ。二つの職場を渡る声は、私をも呼び戻してくれる。私はもう「当たり前でしょ」とは言わない。洗濯機の音が鳴るたび、私は自分の役割を思い出す。明日の弁当は私が作る。祖母の散歩コースは私が更新する。あなたが安心して夜を看護できるように、家の夜は私が見張る。

もう一つ、忘れられない夜がある。暴風の警報で大学が休講になった日、母は夜勤明けで帰るなり、玄関に座り込んだ。靴下のかかとが擦り切れて、親指がのぞいていた。私は慌てて味噌汁を温め、タオルを乾燥機から出して肩にかけた。母は「ありがとう」と言いながら寝室に向かったが、途中でふと立ち止まり、「ごめんね」と言った。その言葉は謝罪ではなく、いつも誰かを優先してきた人の癖だと気づいた。私の中に、静かな怒りと静かな決意が同時に生まれた。私たちの家では、誰も謝らなくていいようにしよう、と。

そのために私は、家族会議を月に一度開くことにした。議題は三つだけ――今月助かったこと、困っていること、次に試すこと。五分で終わるときもあれば、祖母の昔話で一時間かかることもある。それでも、言葉にして共有するだけで、家の空気は軽くなる。私は、家庭のケアにこそ“業務改善”の視点が要ると学んだ。

提言として、学校と地域にお願いがある。ヤングケアラーの自己申告だけに頼らず、定期面談で家庭のケア状況を丁寧に聞き取る仕組みを。自治体は、介護休暇の柔軟な取得を進める中小企業へのインセンティブを。大学は、ケアラーの履修調整を制度として明文化してほしい。家庭は小さな職場だ。労務も安全管理も、目に見えないだけで存在している。

消毒液の匂いは、私にとっても働く匂いになった。洗濯機の音は、私たち家族の点呼だ。母さん、行ってらっしゃい。家は、私が引き受ける。